

「アングロ・サクソン年代記」にみる 領主・上司の呼び名

小林 絢子

6世紀から10世紀頃まで、英国ではいわゆるアングロ・サクソン七王国時代で小国が群雄割拠し、互いに覇権を争った。また、その後期にはこれらの諸国はヴァイキング来襲に苦しんだ。その頃の戦いの長、すなわち「領主」や「太守」に対する呼称は地域によって、またデーン人の影響の大小によって、違っていたが、本論ではその頃の戦いのありさまを詳しく伝える「アングロ・サクソン年代記」にあらわれるそれらの人々の呼び名を整理してみたと思う。

先に「英語英文学研究」第5号⁽¹⁾では ealdorman (alderman, elderman ‘older-man’) について調べた。それは「アングロ・サクソン年代記」の日本語訳⁽²⁾では「太守」と訳されていたが、文字通りに解釈すれば「より年長者」という意味で、豪族、年長者などにも使える呼称であった。

当年代記において、一定の領地を持ち、臣民を戦時に部下として使えるいわゆる「領主」について、その頻出数で ealdorman に次ぐのは eorl (‘earl’)⁽³⁾ という呼び方である。

‘Earl’はもっと古い“Beowulf”などの詩文では warrior ‘戦う人’ という意味で使われたこともあるが、当年代記ではより高い身分の人にあてはめられるようになった。The Oxford English Dictionary にはこの使い方が第一の意味 (A man of noble rank, as distinguished from a ceorl or ordinary freeman) として出ている。つまり、広義では農民の対極に位置する貴族の称号だったのである。

英語の earl はデーン語の jarl で、もともとは彼らのうちの貴族をさすことばであった。この年代記の中の eorl 'earl' と ealdorman 'alderman' の関係について、プラマーは “In 871, the eorl of the Danes is opposed to the ealdorman of the English, but from the Danes the title was adopted by the English, and it ultimately supplanted the older ealdorman.”⁽⁴⁾ と述べている。この年代記の中期から後期にかけて、ヴァイキングとアングロ・サクソン人の戦いは激しさを増す。656, 871, 918, 1052, 1064 年にはこの用例が見られるし、それ以後はもっと多い。これらは11世紀の英国におけるデーン王朝のスヴェインやクヌートとその後継者に仕える副王、総督 (viceroys, governors) を指していると思われる。

Eorl とその活用形の出てくる年号 (写本の種類は問わない) は以下の通りである。

656 (eorles), 675, 777, 851, 871 (eorlas), 874×4, 918, 963, 975, 992, 1013, 1016, 1021, 1036, 1040 (eorles), 1043, 1045, 1046×2, 1047, 1048, 1052×2, 1052 (eorlum), 1052×3, 1055, 1057, 1063, 1064, 1066, 1068, 1069, 1070, 1071, 1075, 1076, 1085, 1086, 1087, 1090, 1091, 1093, 1094, 1095, 1096, 1098, 1099, 1100×3, 1101×3, 1102, 1103, 1104, 1105, 1106×2, 1110, 1111, 1112, 1116, 1117, 1118×2, 1119, 1120, 1123, 1124, 1126, 1127×2, 1128, 1129, 1131, 1138, 1140, 1154

戦いの場面では eorl と呼ばれていた人々も他の場面では「ご主人様」「上様」のような一般的な尊称を奉られている。その場合、以下に見るように神にたいして使われる語 (ModE 'lord' とその関連語) が最も多くその代用となりうる。

Drihten (931年、以下カッコ内の数字は年号をあらわす 1137)、hlaford (1014), rædend 'a ruler, a governor' (975)等がその主な例である。Drihten は “Beowulf” では Geata drihten 「イエーアト人の王」のようにその「民族の指導者」という意味で使われているが、「アングロ・サクソン年代記」では戦いの環境を強調するためか「戦いの」という修飾語をつけて sig-

drihten ‘lord of victory’ として使われている。Hlaford は現代英語の lord となった言葉であり、もとは loaf の番人という意味であったが、時代を経るに従って意味が上昇してきた。

当年代記では「優雅な」という修飾語をつけて hold hlaford ‘gracious lord, liege lord’⁽⁵⁾ として出てきている。1014 年は英国の君主エゼルレドを悩ませたデーン人の王スウエインが亡くなった年であるが、そこではエゼルレドのことを hlaford と呼んでいる。Hold は、当年代記では主に形容詞として使われているが、名詞の場合 (905, 921) はそれだけで土地持ちの領主を指し、jarl と同じくデーン語から英国に移入されたものと思われる。Rædend には rodera 「天の」という修飾語がついている。

domne (853) はラテン語で「ご主人」という意味であったものをこの年代記では「上司」という意味に転用している。また、ラテン語の dominus は英語で drihten (前述) とも訳されている。Domne とその活用形は主に教皇に対して使われることもある。(853 年等) Mund-bora (833, 942, 975) は「民の守護者」(‘a protector, guardian’) という意味で王とか領主の代称 (kenning) である。duc も 1129 年以後使われるようになった。これはラテン語の dux で、軍隊の「指揮者」から、「守り手」、ひいては公爵領地の長、即ち「公爵」をさすようになった。

これらの「守護者」はしばしば「支配者」となりがちである。現代英語の wield⁽⁶⁾ (支配する) とその名詞形の wealdend, waldend、またはその属格形 waldendes (975, 1065) もしばしば見られる。これは OE wealdan ‘to cause’ という動詞から派生したもので、アルフレッド王が翻訳した *Boethius* の書には当年代記にある ‘to rule, to possess’ の意味ですでにつかわれている。

現代でも guard, warder, protector すなわち「守り手」として使われる weard も当年代記の 975 年の記述に見られる。同じ weard でも man がつくと巡回をしている監視兵を指し、それは 1053-C⁽⁷⁾ に見られる。1053 年の記述ではイギリス側の警備兵でウェールズ人に殺された。

その他 *reccend* 'a ruler' (975)、や *Peoden* 'king, prince' (942, 973) のように *cyning* 'king' 「王」と同じ概念でも領主はとらえられている。また、「人民の」という意味の言葉をつけた *Peod-cyning* 'king of the people' という合成語も 1065 年以後に見られる。これらの場合の領主(太守)たちは七王国の王でないせいか、*under-cyng* (1056-C) という呼称もある。

話を戦いの場に戻すと、戦場における主将の働きを賞揚するために様々な敬意をこめた代称が使われていることがわかる。*Hæleþ* は「英雄」の意味があり、937 年や 975 年の記述に使われた。*Heretoga* 'a leader of an army, commander' はこの年代記全編を通じてしばしば使われている。*Here* は 'army' を意味し、*toga* は 'to lead' と分けられる。*Heretoga* は北欧語や Old High German 起源であり、ラテン語では上述の *dux* がこれにあたる。449 年 (E) の記述ではその年に英国島へ来たヘンゲストとホルサを指して使われているし、794 年と 993 年には異教徒、即ち、デーン人の指揮官、指導者に対して使われている。1003 年にはデーン人の王スウェインがそのせりふの中で一般的に「指揮者」を指して言っている。その他、656 年や 1121 年にも出てきている。

英雄ほどではなくても「戦いの指導者」という意味でアイスランド語語源の *hofding* 'chief, leader' は 1076 年に見られる。合成語の *læd-teow* 'a leader, guide' は 1097 年になってようやくつかわれるようになった。普通の戦士を指す合成語 *hilde-rinc* (937) は戦場で身分の上下を問わず使われ、単独で「男」をさす *rinc* も *mæg* も数多く戦士のために使われている。

合成語はしばしば代称として好まれた形式である。例えば上記の *Peod-cyning* も単に *cyning* という他に「人々の王」と言ったほうが強調もできるし、共感も得られる。また韻律上も便利なことも多い。

gefera は 'companion' という原義を持つが、語源不詳である。ローマ人による英国の占領時代には地方知事も指すくらい高いランクの呼称であった。当年代記にでも目上に対して使われ、それに *wic* 'wick, village' を加えて *wic-gefera* (897) とするとその州の長という意味に使える。また、その保護

を受ける人々を特定して、例えばウェールズ人の保護者、という時には *Wealh-gefera* (897年以後) というふうに言える。*Scire-gefera* (963, 1056-C) は 'shire reeve' (州の長) の意味であり、後の世の *sheriff* (保安官) にまで発展した語である。*Gefera* は単体では *reeve*⁽⁸⁾ となって、チョーサーの時代には「家扶」や「管理人」を指すまで意味が下落した。

Degen, Pegn (ModE *thane*) は「側近」と訳され、領主の取り巻きのように受け取られがちであるが、もとはその血族としての貴族をさした。この「年代記」には数多く(465, 656, 755, 874, 897, 905, 988, 1036, 1086等)使用されている。その際の使われ方はプラマーが "It became the title of a new official nobility which ultimately supplanted the old of blood"⁽⁹⁾ と述べているように、王や領主の広い意味の直参の部下であった。

Peow となると 'servant' の意味で、もはや支配者とは対極にあるが、それでも合成語にして上記のように *laed-teow* という呼び方を作り出し、覇者をたたえた。

「アングロ・サクソン年代記」には *Pegn* と *mæg* の他に部下を意味する *huscarl* 'house churl' (1036, 1041, 1070) や *ceorl* 'churl' などの単語がたくさん見られる。*Churl* は13世紀には農夫や田舎者などを意味する蔑称となったが、この頃は単に「男」または王や貴族にの反対に位置する者、という意味であった。⁽¹⁰⁾ 年代記作者達は彼らの働き見逃さないで、詳述している。

先に「アングロ・サクソン年代記にあらわれる女性達」という題名で当年代記の女性像を見てみたが、⁽¹¹⁾ 今回はそこに出てくる男性の地位の名称を調査してみた。それらの名詞と固有名詞との結びつきは一対一対応をしているわけではないので、今回はその部分は見送った。指導的な地位にいる男たちの右往左往や血みどろの戦いがこの年代記の大半を占めているので、その名称を整理するだけでも彼らの活動半径や行動規範が少しはっきりし、この年代記の理解を深めるのに役立つと思う。

注

- (1) 「イギリス封建制度下における alderman について」 「英語英文学研究」第5号 東京家政大学文学部英語英文学会 1999年
- (2) 大沢一雄編訳、「アングロ・サクソン年代記研究」、蒼洋出版株式会社、1991年
- (3) Murray, A. H., et al. eds, *The Oxford English Dictionary (=OED)*, Clarendon, Oxford, 1888-1993, s.v. eorl.
- (4) Plummer, Charles and John Earl, eds., *Two of the Saxon Chronicles; Parallel*, Vol. 1, Clarendon Press, 1972, p. 328.
- (5) プラマーは hold の名詞形については“a title introduced into English by the Danes; probably a holder of allodial land (allodial land とは封建時代の自由保有地：筆者訳).” との説明を与えている。「同書」 p. 362.
- (6) *OED* s.v. wield
- (7) C-写本は *The Abingdon Chronicle*; AD 956-1066; Conner, Patrick W. ed., *The Anglo-Saxon Chronicle*, Collaborative Edition, Vol. 10. D.S. Brewer, Cambridge, 1996.
- (8) *OED* s.v. reeve
- (9) Plummer, 「同書」 p. 404.
- (10) *OED* s.v. churl
- (11) 「東京家政大学研究紀要」 第39集(1)、1998年